

---

# 魔法の学園！？

メタ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

## 【小説タイトル】

# 魔法の学園！？

[T<sub>1</sub>-HZ]

N 90188 D

【作者名】

六

【おひさま】

## 第一話 田常一・?

ドカ！……………バキア…！

「ぐはあ…？」

腹に強烈な痛みを感じながら田見めた俺、森本 明。黒目、黒髪な男。

ベットの横にたたずむ鬼・・・もとい針元 彩。赤い髪に赤い瞳、傍から見れば美少女に見えるこの女・・・しかしこの拳はすべてを粉碎する。

「なにすんだ彩…！」

「いつまでも起きないバカを起こしに着てあげたんじゃない！感謝しなさい。」

こいつ…

「頼んだ覚えはないぞ…？」

「あんたは、起こしに来なかつたら絶対に遅刻するでしょう。だからこつてきてあげたのよ」

まったくこいつはお節介なやつだな

俺だつて、一人でおきられつるわい！……………昨日から田見ましをセットしておいたからな…・・・あれ…？ 田見ましがない…！！！

？？？？？

あいつ何持つてるんだ…？

「彩！？・・・・・見間違이じゃなければその手に持つているものはもしや田覓ましかい？？？」

「これー？・・いきなり鳴るから殴つたよーーーー！」

おー！――なに自分は悪くないみたいにな言こ方してんのじゅ――――  
無事か～ キャシ～（田舎ましです。）

「とにかく田舎ましを返せ…………」

彩からキャシーを取り戻すが・・・・

「ん？？？時計つて針が一本だつたつけ！？」

あいつ、まだ何か持つてないか！？？？

「彩、お前その棒はどこから待つてきた？」

彩の手には細長い棒が、握られていた・・・・・

「これ？？あなたが今もつてるものの中からよ？？」

これが俺の朝の出来事である・・・・・キャシー・・・・

「災難だつたな・・・・・」

今俺同情している男の名前は、最上 **直青もがみなお**い髪に緑色の瞳、整った容姿をしていて美少年の類に入る。幾度となく告白を受けている男の敵である。しかし付き合った女性はいないらしい。

「ああ・・・誰かあいつを止める勇者はいないのかー？」

「無理だな・・・あいつは拳だけでなく魔法もトップクラスだからな」

そうあいつは、**ヒーメルギアース魔法学園**のトップクラスの実力を持っている。（俺たちはこの春に三年になつた。）

魔法とは、かつて地球上に隕石が落ちてきた際に発せられた放射線の影響で、汚染された大地が新たに手に入れた力が魔法である。それが役5千年前の話。

そして人間はそれを操る力を身につけた。これが役3千年前の話である。

しかしそうしての人が使えるわけではなく、力の強さも様々で、強いやつもいれば弱いやつもいる。

主に魔法の力は、五つに分けられている。攻撃魔法、防御魔法、補助魔法、精霊魔法、召喚魔法である。

すべてが使えるわけではなく、人それぞれ得意なものがあり、この五つのどれかに特化している。

彩は、あの性格にふさはしく、攻撃魔法に特化している。しかも、かなり・・・・・ガクガクガクガク。直のやつは、防御魔法や補助魔法に特化している。確か精霊魔法もそれなりに使えたような・・・

この属性の相性は髪の色や瞳の色である程度わかるらしい・・・  
赤は攻撃的な色で、青がおとなしい色で、緑が中性的な色らしい。

すべてがわかるわけではないが、ある程度参考はになる。

そして彩は、三年にしてこの学園のトップクラスにいる。この学園は六年制でその三年にしてトップクラス・・・・恐ろしい・・・・

・ガクガクガクガク

「確かに彩は、攻撃魔法ならトップクラスだけど、防御とかは全然だめだし。その点、直は防御や補助ならトップクラスじゃん！？お前なら彩を抑えられる！！！あいつを止めてくれ！！！！」

直も、三年にはなるのがほぼ不可能なトップクラスの実力を持つている。

「無理だな・・・その役はお前に」ふさわしいだろ

「なぜだ！？あんな凶暴な女、いや人間には例えられない、いうなれば鬼・・・悪鬼だ！！！」

「ほお～・・・遺言はいいおわったか？」

はうーーーーーーーー

背後には笑顔で佇んでいた鬼が・・・

「あ、彩さん！？」いつからそこにはいたしゃつたのですか？？？？

「最初つからかな～？？」

え、笑顔が怖い・・・

「は、ははははは・・・」

乾いた笑いしか出てこない・・・・  
ダッシュで逃げようとするが・・・・  
彩の周りに火の玉が浮かんでいる。

「死んで来い！！！！！」

無数の火の玉が当たり目の前が真っ白になつた。

## 第一話 良い仲間！？

俺たちは今、防御魔法の授業を受けている。

なぜ俺の体が平氣かつて！？？？？？？？愚問だな。

あれくらいでへばつてたら体がもたんというわけだ。

話を戻すが、今は防御魔法の授業であり、今は水の防御魔法を展開しているのだが・・・

パシャン・・・・・パシャン・・・・・パシャン・・・

「ぐあああああ！？！何でうまくいかね！？」

幾度となく失敗を繰り替えしてから明がわめく。しかしそのとなりでは・・・・・

「・・・・・その水の理に従い全てを阻む盾となれ・・・・・

水盾

ウォーカーダール

見事な水の盾が、直の前に出来上がっていた。これは水の防御魔法の初級の技。三年にもなれば誰でも使えるはずだ・・・・・一人を除いて・・・・・

さらに直は続けざまに・・・

「・・・・・流れ出る理は強固にて、破れざるものなり・・・・・水

牢」  
「ロック

俺の周りに水の膜のようなものができあがる・・・・・

「おい！……！何してんだ！？」

「ん！？技の練習。安心しろそれは水の中級魔法で相手を閉じ込め  
るものだから。」

なら平氣か……て、おい……

「んなこと些一から、わざわざおせわ……」

キーーン「ーーーンカーーーン」  
タイミングよくチャイムが鳴り響く…………

「じゃあな、がんばって向かせよ。」

「これどこでから行けって…………」

「残念だが授業以外での魔法の行使は禁止されているんでな。」

そう言つてあいつは教室から出て「行く…………が、俺は見たぞ！  
！あいつの去り際のあの笑い顔…………か、確信犯か…………  
ね、狙つてたな…………OTN

一時間後…………

「お～早かつたじゃねえか。」

「……ぜえ……ぜえ……見たか……」の……俺の……ちか……ら

扉により掛かりながら息も絶え絶えに言つ。

「ちなみにじりゅうやって抜け出した??」

「まあ・・・自力で・・・」

本当は運よく通りかかった教官に助けてもらつたのだが、それは黙つておいた。

「なるほどな。教官に助けてもらつたのか。」

「こいつ・・・心を読んだのか!!」

「お前はエスパーか??」

「全部、口に出してたぞ・・・」

「・・・」

「相変わらず魔法は使えないのか??」

「まあな・・・」

「この学園は、魔法の素質があるやつが推薦つて感じで入学を許される。俺も素質はあつたんだろうが、いまいち魔法が使えない。

「どうすんだ?就職?」

「何とかなるや」

「お前、魔法が使えないんじゃ騎士団ビンガムか就職先が見つからな

いぞ。」

騎士団は「の学園の大半の生徒がそこに就職する。騎士団に入れないとすくなわち落ちこぼれを、意味する。

「三年になつたら課外実習があるから、せめて初歩の魔法が使えないと身を守れないぞ。」

課外実習とは、三年になつたらパーティを組んで外の世界に出て、各班ごとに決めた課題をクリアしていくものだ。

パーティには魔法使いだけでなく前衛も必要。三年からは校舎が違うものになり、そこでは様々な人たちが学んでいる、格闘専門の人達やらなんやらがわんさかいるので、パーティを組むのには最適に鳴っている。

「課題をやつてみて、駄目ならこの学園を辞める……」

「…シ…マジかよ…ち…」

「バシイ……！」

「なんだ!?これ……」

「パーティの結成用紙だ……書け……！」

「はあ!? 何でだよ……お前は違う奴と組むんじゃなかつたのか!？」

「いいから……書け……！」

有無を言わせない迫力に負けて書いてしまった・・・

「俺みたいな足手まといいてもいいのかよ？？」

「足手まといかどうかは、私が決める」とだ。

思わず笑ってしまいそうになる理由だ

「なら俺を入れたことを後悔すんなよ！」「…」

俺は、殴り書きで自分の名前を書いていった。

「なら、私も入るね」

そう言つて書いてきたのは綾だつた。

仲間になるのか？

綾が入った事で、魔法使いが三人になつたがこれだけ、パーティーが組めるほど世の中簡単ではない。

「魔法使いが三人か（一人は戦力外）ってことは、前衛が三人ぐらいい必要かな？」

そう言う俺に対し「一人は・・・

「二三人でいいだろ（です）！…」

息がぴつたり・・・じゃなくて…！

「何でだよ！？魔法使いが三人もいるのなら前衛は少なくとも三人は必要だろ？」

「必要ないわよ・・・魔法使いは二人でもあんたは前衛もできるでしょ？」

「できるけど・・・専門じゃないぜ？」

俺は魔法が使えないからほかの道も探すために。魔法使いとしては異質の格闘技を習っている。

しかも、剣術だけでなく、無手も相当なレベルになつていてる・・・が、やはりここでも魔法が必要になってくる。

魔法は言霊を発して魔法を放つタイプと、魔力を自らの体に浸透させることで身体能力を向上させる一つのタイプが存在する。前者のタイプは後者のタイプもできるのだが魔力をコントロールす

るのに長けているためほとんどの人が前者のタイプを選ぶ。

ちなみに俺は・・・・・両方できるのか・・・できないのか・・・

OTL

周りに比べると弱いが後者のタイプのほうがまだ使える・・・

「できるなら後は私の専門の人の友達に頼むから平気だより

「でもなあ・・・」

俺は足手まといになるからなあ・・・・そんなことを考えていると

「いりは綾に任せましょつ

直は俺が何を考えているのかわかるらしく・・・

「直がそいつ言つならいいけど、ちなみにどんな人?」

「名前は、香坂 時雨、と(最 の 子ケ イ・・・) 原 健だ  
よ

「香坂 時雨?」

直はきいたことがあるらしくかなり驚いている

「知ってるのか?」

「名前は聞いたことはある。原 健の方も何かと有名だ。」

香坂 時雨・・・・原 健・・・・はて? ? ? 誰だ? ?

「お前のことだから知らないと思うから教えてやるけど、一人ともかなり有名だ。二人はともに武術においてトップクラスの成績で神童と呼ばれている。」

「なつ! ! ! そんなにすゞいのか?」

「香坂 時雨の方は剣術においては右に出るものはないらしい。原 健は天神流の使い手だ」

「天神流! ?」

天神流は今この世で最も強いとされている武術であり無段位であつても他の武術を圧倒すると言われている。ちなみに、明も天神流を使つていてるが・・・無段位である。ちなみにどんなにがんばつても段位など明は取れない・・・魔力が使えないから・・・

「段位はいくつなんだ?」

「確かに初段といつていたな」

段位があるのか。明は素直に感心した。

「その二人を呼んでくるから明がいてもなんら問題はないってこと。」

「綾はそういうているが、確かに一人がいれば俺なんていてもいなくとも一緒だけど・・・

「二人はOKしてくれたのか？」

「うん……すでにア解済み……」

「俺がいることは伝えてあるのか？？」

「もち……知ってるよ……」

「これでも俺は学園最強の落ちこぼれの称号を欲しいままにしている。」

・・・〇丁

俺がいるつて知ってるのにパーティーに参加してくれるんだ？？

「これでも綾は学園の魔人つて言われているからな」

直が小声で話しかけてくる。・・てか心を読むな！……プライバシーにかかるぞ！！

「なるほど、俺がいても綾がいたほうが+でも得になると思つたのか・・」

本人たちは知つてゐるのか知らないのか・・・直は学園の「鉄壁」と言われている。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9018d/>

---

魔法の学園！？

2010年11月24日09時22分発行